

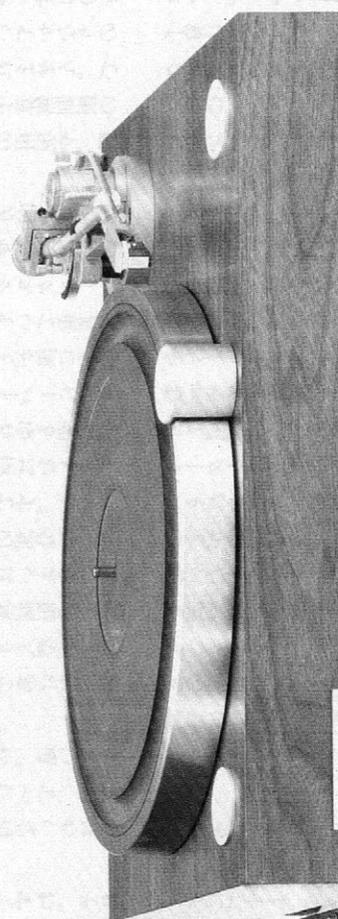
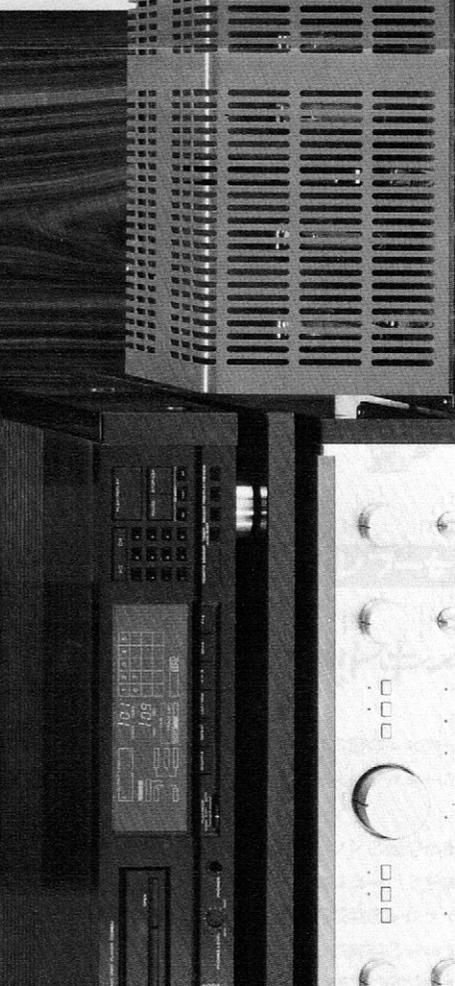
HIGHER システム 予算200万円

柳沢 功力

| | | | |
|-----------|--------------------|--------------|-----------|
| スピーカー | トーレンス システム・レーサー | JM325D/Mk2 | ¥ 860,000 |
| コントロールアンプ | アキエフエーゼ | C200V | ¥ 350,000 |
| パワーアンプ | ウエスギ | U-BROS 10 | ¥ 470,000 |
| CDプレーヤー | マランツ | CD880J | ¥ 90,000 |
| カートリッジ | オルトフォン | MC30 SuperII | ¥ 60,000 |
| プレーヤー | ヤマハ | GT2000L | ¥ 158,000 |

価格合計 ¥1,988,000

●予算は200万円と縮小だが、基本的な組合せの意図は前2例と変わらない。やはり、しかりとして実在感のある中域を中心に据え、全体の音をまとめ上げてゆきたい。ただ、今度はホーン型の中域やツイーターのブラスあるいはアルミアンプ駆動などは無理。それ自体で密度の高い中域を備えたスピーカーを選び、普通にセパレートアンプで鳴らすことになる。



HIGHER システム予算2000万円

サウンドドレザインのプロセスを追う

組合せの 意図

この組合せではスピーカーに、トランス・ジャンムーラJ M 3 2 5 D 2を採用されましたが、まずその理由から。

ここでも基本的な組合せの意図は前2例と同じなんです。ということは、やはりしっかりと実在感のある中域を中心に据え、全体の音をまとめてゆきたい。でも予算が200万円ですから、ホーン型の中域とかあるいはトワイターを別にプラスするか、マルチアンプ駆動をすとかいったことは無理。普通のスピーカーをそのままの状態を使い、普通にセパレートアンプで鳴らす範囲になるわけです。

となると、第一にスピーカーの選択が問題です。要するにそれ自体、バランスのよさと同時に密度の高い中音域を備えていて、ここでの一連の狙いの中で活かそうなるものでなくてはならない。

——この価格帯で、その狙いにもっとも合うのがこれだったのでね。

もっとも、と強調されると多少自信も揺らぐのだけど、最近聴く機会のあったスピーカーの中では、たしかにその通り。では、このスピーカーがとくに中域重視の設計か

というところではない。ユニットはソフドドームで、僕の特論としても、一般にソフトドームの中域は、耳当たりはいいがイメージが散漫になり、実在感は乏しくなりがちと思っていた。ところがこのスピーカーはむしろ逆で、とても芯のしっかりした音像感のよいものに仕上がっているんです。

アンプについて

アンプはコントロールアンプとパワーアンプとの組合せを4例作って比較試験されましたが、この4例をノミネートされた理由はなんですか。

残り予算は140万円だから、アンプにさけるのは50~70万円でしょう。その中で考えておきたかったのは、実はこのスピーカーは、いま申し上げたように大変魅力的なんです。ただし低音に関してはやや量感的に寂しい印象がある。ですからその辺をパワーアンプのキャラクターで補いたかった。また、コントロールアンプのトーンコントロール機能にも期待しなかった。ただし、ラックスマンの組合せだけはちょっと違って、これはA級アンプを一つ加えてみたかったです。

すると、コントロールアンプにアキ

フエーズC 200Vが3度も登場しているのは、トーンコントロール機能を買ってのことなんですか。

いやいや、もちろんアンプとしてのクオリティや音色の魅力があればこそですが、トーンコントロール機能を重視したのも事実だ。実際、例えば最終的に決まったアキユフエーズとウエスキの組合せの場合も、はじめの段階では、これはコントロールアンプもウエスキのつもりだったんです。

では、なぜその最終結果に決定したのか、試験過程をお話してください。

まずアキユフエーズC 200VとP 300Vの組合せ。これは中庸のバランス感覚が絶妙で、温度感のよさ、音の厚さなど魅力ポイントの多いものです。ただ、多少ハイエンドが素気ない気分だったり、声など、やや力を強めすぎる傾向があった。

——その場合、トーンコントロールは働かせたのですか。働かせたとしたら、そのポジションを参考までに……。

はじめはOFF。つぎにONにしていろいろ試し、やはりこのスピーカーは、トーンコントロールで上手に調整することの重要性を確認しました。

そのときのポジションですが、これは全く参考までにですよ。部屋が変われば違っ

てくるし、ここでの場合も完全につめていった結果ではないから……。で、まず40Hzをいっぱい上げる。500Hzは2dBアップ。つづいて2kHzは2dBダウン。ハイエンドの20kHzは3dBアップ。これで全体の雰囲気が大変によくなったんです。

さて、つづいてのアンプはC 200VとデンオンのPOA 7700ですが、これは予想以上にこの組合せとの相性がよかった。この場合もトーンコントロールはONですが、低音域の厚さ、ほどよい重量感、リズム感など上等。ヴォーカルだけがや張りの強い印象を残したのだけど、この段階では第1候補の資格十分だった。

つぎのラックスマンの組合せは、はじめから低音の質的な量感が物足りないだろうとは思っていた。実際その通りで、重量感やスケール感はどうしてもでない。このア



ンプにはトーンコントロールもないわけですが、この場合にはトーンコントロールで補正すればいい、という感じではないんです。もっと質的な違いなんだ。

ではなぜ、そう思いながらも鳴らしたのかというと、もう一面の、小ぶりながらすごくデリケートでニュアンスに富んだ音の方向が楽しめるかもしれない、と思っただけです。そしてこれも中。暖かく、愛らしく、濃やかなニュアンスの表現がタップリで、身体中くすぐられるような気分になる。ただ、今回の狙いとは、少しかけ離れ過ぎていた。

最後がウエスギですが、これははじめはコントロールアンプもウエスギU-BRO S8で鳴らし、この状態で大変にすばらしかった。方向としてはデンオン同様だが、もっと滑らかになるし、雰囲気はしなやかなのですが、音の芯はよりしっかりする。ただ、トーンコントロールがないものだから、バランスがもう一つしっくりしない。

そこで思い切ってコントロールアンプをC200Vに替え、トーンコントロールを利かせてみた。これは事前には考えていなかった組合せなんですが、これで決まり、という気分になりましたね。音色はやや角を強めた感じにもなったけど、滑らかさは失われずに、上等だった。

コンパクトプレーヤー

コンパクトプレーヤー

CDプレーヤーの、この4機種のみネット理由は……。10万円以下2機種と18万円2機種に分かれています。

極力、予算をオーバーしたくなかったから、残りのアナログ機器のことも考えると、CDプレーヤーは10万円以下で抑えたかった。でも、その倍くらいいい、いわゆる高級機にすることで著しく結果が違えば、無理をしてみようと思ったわけですね。

ですから、10万円まででこの組合せに合いうような、音色が暖かくソノリテイのよい製品を2モデル。それと高級機にランクされる18万円の2機種を選んでみた。

結果は10万円以下のマランツに決められました。この理由は。

実は高級機が意外に合わなかった。パイオニアはもちろんだいい音なんですけど、この組合せだと少し響きが重くなる傾向なんだ。ソニーの場合はそんなことはなく、とても伸び伸びしているのだけど、今度は少しクツキリとさせすぎる感じでもある。という経過で、意外にも高級機がともに相性がわなかった。

で、マランツとビクターが残ったわけだけど、これはどちらもいい。傾向は比較的に似ていて、ともに甘く、そして品のいい音色を持っている。ただ、マランツの方がその中により人肌の感触など意識させるのに対し、ビクターは少しスツキリとさせてしまう方向でもあったわけですね。

アナログプレーヤー/カートリッジ

アナログプレーヤーにヤマハGT20

00Lを選択した理由は。

ご存じのようにアナログプレーヤーは製品数激減で、これくらいの値段で探そうと

すると、選択の余地がないほど少ない。とあって、だからこれにしたのではなく、この製品は以前から僕の好きなモデルであり、密度の高い音を聴かせるプレーヤーなんです。これは残っていてくれてよかったです。

カートリッジはシュアー/ウルトラ500とオルトフォンMC30スーパーIIをノミネートして、オルトフォンに決定されたわけですね。

MC30スーパーIIは、SPUほどに重厚感のあるタイプではないのですが、でもMC3000ほどに現代的な音色ではなく、いわば色のほどよく濃いタイプ。一方のシュアーは、これは非常に高性能で、この上なく繊細なタッチを聴かせる。ここではスピーカーにリボン型トウィーター、といったわけにはゆかなかったので、カートリッジにこうした傾向をもつてくるとうかと思っただけです。

その繊細さの効果はたしかにです。が、トータルで見ると、やはりオルトフォンの、色濃く、脂ののった音色がより魅力的だったわけですね。

まとめ

どうでしょう、予算200万円で当初の意図は十分活かされましたか。

そう、例えばいまのアナログなど、オルトフォンとシュアーを混ぜたような音になつてくれると、さらによかったのだけど、一応、成功はしていると思うんだ。

結果として、どんな音にまとまっているのでしょうか。

これくらいの値段のシステムとしては、

やはり相当に暖味さのない、説得力のある音を聴かせます。ただ、常にこれと車の両輪でなくてはならないのが、響きの豊かさや滑らかさ。それにソノリテイのよさなど、音楽的な雰囲気の高まりで、このシステムもそれを十分に備えています。

だからヴォーカルに例をとれば、十分に実在感のある音像をしっかりと立て、同時に声の質感は暖かく滑らかで、唇の小さなふるえやはほの脹らみのようなニュアンスを、濃やかに表現する。もちろんプログラムのソースに対する適応も、十分な広さを持っています。

